

第120回 三方限古典塾（'16, 10, 20）

洪 自誠（1561～1616）「葉根圃」（その3 - 37）

- 1 人生の福境禍区は、皆念想より造成す。故に釈氏云う、「利欲に熾然ならば、即ち是れ火抗なり。貪愛に沈溺せば、便ち苦海となる。一念清浄ならば、烈焰も池と成り、一念警覚せば、船も彼岸に登る」と。念頭稍異ならば、境界は頓に殊なる。慎しまざるべけんや。 後集 108

（意訳） 人生の幸不幸の境涯の区別は、すべてその人自身の心が作り出したものである。故に釈迦も「利欲の火が燃え盛ると、その人生は灼熱の地獄の海となり、貪欲や執着に溺れると人生は苦しみの世界となる。心が少し清浄に変わっただけで、燃え盛る炎も静かな池に変わり、心が迷いから醒めれば苦海を渡る船も悟りの彼岸に達する」と言っている。心の持ち方が少し変わっただけで、この世の中はがらりと姿を変える。よくよく慎むべきである。

（余説） 儒家を自認する洪自誠ですが、ここでは釈迦の言葉を借りています。仏教では、迷いの此岸（迷いの世界・穢土）にいる凡夫を乗せた船が、悟りの理想の彼岸（浄土）に到着することが「船彼岸に登る」で、その船が仏の教えです。我が家の菩提寺の九月暦の標語は「心が変われば景色が変わる」でした。己の心のどこをどのように変えるかが現実の課題です。また、現在の政治や行政に対する不満が多々聞かれますが、ユートピア（理想郷）とは、この世には「どこにもない場所」を意味する造語だそうです。

（参考） 碧巖録「誰が家にか名月清風なからん」（それを感得できるか否かはその心次第）
相田みつを「しあわせは いつも じぶんのこころが きめる」

- 2 縄鋸に木も断たれ、水滴も石を穿たる。道を学ぶ者は、須く力索を加うべし。水到らば渠成り、瓜熟せば蒂落つ。道を得る者は一えに天機に任す。 後集 109

（意訳） 縄でも長い間こすり続けると、木を断ち切る鋸となる。水滴も時間をかければ石に穴を開ける。道を学ぶ者は、このようなたゆまぬ努力を心がけなければならない。また、水が流れると自然に溝ができ、瓜も熟すると自然にへたまでも落ちる。道を得ようとする者は、このように天の自然なはたらきに任せておればよい。

（余説） 「縄鋸木断」「水滴石穿」という四字成語があります。何の力もないような小さいものであっても、長い年月怠らずに継続していると、いつかは目的を達成することができるという意味です。努力を継続することは重要ですが、それだけではなく、天の機の熟するのを待つ、地の利を活かす、民心の和合を得ることを忘れては事は成就しないと孟子は戒めています。それが「水到渠成」です。ただ、その条件も「天の機く地の利く民心の和合」という順序になります。

（参考） 漢書・枚乘伝「泰山の磐は石を穿ち、殫極の綆は幹を断つ。水は石の鑽にあらざ。索は木の鋸にあらざ。漸靡のこれをして然らしむなり」
孟子・公孫丑「天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず」
范成大「功名は水到れりて自ずから渠成る」

3 草木も纒かに零落するや、便ち萌穎を根底に露わす。自序は凝寒すと雖も、
 終に陽氣を飛灰に回らす。肅殺の中にも、生々の意、常に之が主となる。即ち此れ
 以て天地の心を見るべし。 後集 111

(意識) 草木が枯れ落ちる秋には、すでにその根元に春の芽生えを見せている。四季が順序正しくめぐって凍てつく冬の寒さが来ても、灰が飛ぶ冬至となって陽氣が訪れる。草木を枯らす厳しさの中に、生き生きとした生命力が宿り、常にこれが主となって四季が回っている。ここにこそ、天地自然の仕組みを見ることができる。。

(余説) 今年は12月22日が冬至です。この日は陰がきわまって陽が帰ってくるとして「一陽来復」と呼ばれます。「冬来たりなば春遠からじ」の日です。これは、悪いことが続いたのがようやく回復して善い方向に向いてくることでもあります。今日の変動する経済や難しい国際情勢、また人間関係においても同じと考えて、陰がきわまっても、明るい未来の到来を信じて楽天的に待ち、萌穎を根底を見つけることも必要でしょう。「暗さこそ光をつつみ、悲しみこそ喜びを含む」「冬なくば春なきに」という仏語もあります。「飛灰に回らす」とは、昔の中国で、竹筒で作られた楽器に入れた灰が飛び出る様子によって冬至の到来を占ったという故事によります。

4 風月花柳無くば、造化を成さず。情欲嗜好無くば、心体を成さず。只我を
 以て物を転じ、物を以て我を役せずば、則ち嗜慾も天機に非ざるは莫く、塵情
 も即ち是れ理境なり。 後集 115

(意識) 月や風、花や柳などの風流物がなかったならば、この天地自然は成り立たない。また、人間が本来に持つ欲望や嗜みや好みが無かったならば人の心は成り立たない。

ただ、人が物を使うのであって、人が物に使われないようにすれば、好みも欲望もこの人生に欠かせないものとなり、俗物的な心の中にこそ理想の境地を見いだすであろう。

(余説) 風月花柳がないところには自然は成り立たないのと同じく、人が本来持っている情欲や嗜好という現実から離れたところに人生はありえません。その情欲や嗜好に流されないためにはいかにあるべきかを述べています。人生において存在する事柄は、全て必要にして十分なことばかりではなかろうかと思えます。

本来、物はそれを使うために存在するはずですが、進歩が著しい現代においては、物に使われているような姿が少なからず見られます。また、同様に多忙な現代では、使うはずの「時間」に使われているような状況もあります。主人公はあくまで自分です。

浅田次郎に、明治政府が一日を24時間と定め、60分、60秒と細かく区切ることに違和感を持ち失敗しながら、時に支配されない人間でありたいと願い続ける、元武士で近衛将校の短編があります。それまで東の空が白む「明け六つ」、日が沈む「暮れ六つ」とし、夏は昼間が長く冬は夜が長いという鷹揚な時の流れで、武士も町人も百姓も、何の不都合も感じず暮らしていたのにどうして、という思いがあります。

(参考) 菜根譚(後集94)「我を以て物を転ずる者は、得も固より喜ばず、失も亦憂えず、大地も尽く逍遙に属す。物を以て我を役する者は、逆には固より憎を生じ、順にも亦愛を生じ、一毛にも便ち纏縛を生ず。」(先月の分)